

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-132	12-015	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
The effect of alcohol binge drinking in early pregnancy on general intelligence in children. 妊娠初期における短時間大量飲酒が子供の全般的知能におよぼす影響		
執筆者		
US Kesmodel, H-L Falgreen Eriksen, M Underbjerg, TR Kilburn, H Støvring, T Wimberley, EL Mortensene		
掲載誌		
BJOG. 2012 Sep;119(10):1222-31		
キーワード		
短時間大量飲酒、知能、IQ、神経発達への影響、出生前曝露		
要 旨		
目的： 早期妊娠時の短時間大量飲酒が、出生後の子供の 5 歳時点での全般的知能に及ぼす影響を検討する。短時間大量飲酒の回数及び妊娠中における時期も含めて検討する。		
方法： デンマークの 4 市において 2003-2008 年に神経心理学的試験を受けた女性 1,617 人のコホートとその子供たちを対象とした追跡研究である。妊娠期の飲酒状況をもとに対象者を抽出した。5 歳の時点で改訂版 Wechsler Preschool and Primary Scale of Intelligence (WPPSI-R) を施行した。以下の項目を解析時の重要な交絡因子と考えた：両親の教育、母の IQ、出世前の母親の喫煙、テスト時点での子供の年齢、(子供の) 性別、テスト施行者。一方、その他の調整因子として次の項目を含むものをフル・モデルとした：出世以前における母親の平均アルコール摂取量、母親の年齢および妊娠前の体格指数 (body mass index: BMI)、出産回数、家庭環境、出生後の親の喫煙状況、健康状況、聴力・視力障害の指標。		
結果： 短時間大量飲酒を報告した母親とそうでない母親の間に子供の 5 歳における全般的知能の違いはなかった。ただし例外として、主要交絡因子調整モデルにおける解析では、妊娠 1-2 週における短時間大量飲酒は全検査 IQ の低下に対し予防的であり (オッズ比 0.54:95% 信頼区間：0.31-0.96)。それ以外は、短時間大量飲酒の回数 (最高 12 回) や時期などによる統計学的な有意差は認めなかった。		
結論： 早期妊娠時における短時間大量飲酒の有無と、子供の 5 歳時点での全般的知能には系統的な関連を認めなかった。しかし、妊娠 1-2 週における短時間大量飲酒は全検査 IQ 低下に対し予防的であった。この見かけ上の関連はおそらく残渣交絡によるものと思われる。		